

『文久写本狂言集』(愛知県立大学附属図書館蔵) 翻刻 九

狂言研究会

愛知県立大学附属図書館の貴重書の中に『文久写本狂言集』半紙本十五冊がある。文久元年(一八六一)から文久二年(一八六二)にかけて書写されたもので、写しとしてはさ程古くはないが、狂言台本として八十四曲を収めるほか餅酒などの小舞も書きとどめている。内容を調査すると、「是ハ此隣の者て御座る」(心奪ほか)のように「あたり」を「隣」の字を用いて記す鷺仁右衛門派の特徴を持ち、台本としては『鷺賢通本』に酷似するものであることが判明した。したがって、『日本古典全書 狂言集』上中下(朝日新聞社)に収められた狂言の原態を示しているかと思われ、また古典全書に収められなかった曲も少なからずこの『文久写本狂言集』に収録されて、四十余曲に及ぶので、ここに翻刻することによって、『鷺賢通本』の補強に一役を担うことが期待されるものである。

以下に所収曲を載せ、『日本古典全書 狂言集』にないものには○印を付した。

- ① 心奪 止動方角 二人袴 伊呂波 ○花争 ○氏結
- ② 骨皮 ○宝の瘤取 ○菊水祖父 井礪 名取川
- ③ ○棒縛 ○文荷 鱸包丁 連歌盗人 ○人歟杭歟
- ④ ○苞山伏 ○鬼の小槌 三人片輪 昆布売
- ⑤ ○飛越 福の神 瓜盗人 萩大名 ○薩摩守
- ⑥ ○文相撲 ○鼻取相撲 ○鳴神 ○地藏舞 二千石
○文蔵
- ⑦ 柿山伏 鈍太郎 伯養 ○悪太郎 茶壺
- ⑧ 抜空 伯母が酒 しひり 墨塗り ○空腕
- ⑨ 膏薬煉 ○鶏聳 狐塚 ○栄螺 ○土筆
- ⑩ ○酔辛 ○吃り ○鏡男 犬山伏 ○太刀奪
- ⑪ ○小舞(餅酒、雁厂金、同、弓矢立会、三人夫、鶴

亀、若松、勝栗、松樫、土車、七ツ成子、宝の癩取、掛川、泰山府君、宇治の晒、暁明星、最物細、京土産、小山伏、十七八、末の松山、雪山、福の神、先文、あの山、海道下、石引、番匠屋、鎌倉女郎、春雨、杉の木、住吉、鶴飼、善界、八鳥、加茂、笠之段、玉之段、山姥、鞍馬天狗、景清、猩、蟬丸、放下僧、道明寺、紅葉狩)

○物真似 寝音曲 ○早漆 伊文字 腰折 ○呼声 素袍落

⑫ 末広加利 ○柑子 ○不聞座頭 ○磁石 文山立

○呂蓮 餅酒 恵比須毘沙門

⑬ ○鎌腹 ○内沙汰 合柿 ○鬼ノま、子 ○仁王

⑭ 塗師 米市 八句連歌 栗焼 花盗人

⑮ 八幡の前 ○鐘の音 ○惣八 千鳥 ○仏師

布施無経 ○縄なひ ○歌仙

今回は「あいち国文第8号」に掲載した『文久写本狂言集』翻刻八につづくものである。

凡例

一、底本は『文久写本狂言集』（愛知県立大学附属図書館蔵の貴重書）である。

一、底本は当て字の非常に多いものであるが、できる限り忠実に翻刻することを原則とした。但し、読解の便と印字の煩雑さを避けて以下のような処理を施した。

1 漢字は現在通行の字体に統一した。異体字・略体字なども原則として通行のものにした。

(支↓事 涼↓涼 臺↓台 姥↓嬉 迨↓迄など) 但し、哥・鉢・坐はそのままとした。

2 台詞は平仮名、ト書は片仮名を原則としているが、台詞中の助詞に使用の多いハニトノなどはそのままとした。

3 「・メ・ノ・ハ・ワ・ハなどの合字は開いて、それぞれコト・シメ・シテ・トキ・トモ・よりとした。

4 句読点も底本のままとした。台詞の変り目にくらかの空白を設けているが、適宜判断して句切りに一字分空ける処理をした。

5 誤記と判断し得る場合も修正せず(ママ)と傍記した。

6 謡の部分に付されたゴマ点は省略した。

〔栗焼〕

栗焼

是ハ此隣の者て御坐る召仕ふ者を呼出て見する物

か御座る太郎冠者居るかやい はあ 有るか お前に

汝を呼出すハ別の事ても無そちに見する物か有程に夫に

待て 畏て御座る やい／＼只今去方より重の内をも

らふたか何て有ふそ推量して見よ 去れハ何

んで御座り升ふそ蜜柑に御座りませう いや／＼
蒲萄か梨子で御座り升ふ いや／＼見よ栗しや
よ 扱も／＼見事な栗哉ケ様の大きな栗ハ終に見
ました事ハ御座りませぬ 夫に就而不思議な事か有る
ケ様の物を被下ふならハ三十か五十こふ筈しやに四拾有
か合点の行ぬか汝少ト考て見よ 去れハ何と致した
事て御座り升ふそいや申私の目出度ふ判じまして
御座る 何と判したぞ あなたとこなたと始終仰合
されふとのお下心て哉御座り升う 是ハ能ふ社推量
したそうて哉有ふ扱幸な事か有今晚客来を
申請るに依て此栗を出度ひと思へ共客ハ七八拾人程も
有り栗ハ四拾しやか是をもてなす分別ハ有まいか
是ハ又格別な事て御座りまするか何と致したれば
御饗^{チカシ}応に成升ふそ申能い事か御座りまする 何と
するぞ 先夫を火取まして大薬研へ入てくわらり
／＼とおろしまして出させられたならハ七八拾人
の事ハ扱置式百人へも三百人^江も出させられませふ
汝ハむざとした事を云ふ夫てハ此栗の見事なか賞
翫にないよ 扱ハ其栗の見事なを御賞翫にと有る
事て御座るか 其通しや 何と致した物て御座ふそ
いや申致様か御座りまする先夫をとつくりと火取り
まして扱ぬる湯にて洗上ケ夫を銀の鉢杯へ入れて
御座敷へ出させられたらハ参るお方もまいらぬお方も

やれ／＼見事な栗哉と一同に御誉被成たらハいつ
れも様への御饗^{チカシ}応に成りませふ 是ハ一段とよからふ
夫ならハ火取にやらふ則汝に云付る 畏て御座る
言ふ迄ハなけれ共数の揃ふた物しや程に随分と念の入て
火取てこひ 何か扱畏て御座る 早ふ火取てこひ
待て居るぞ はあ是ハ六ヶ敷事を被仰付た 扱
とこ許て火取ふそ御次で火取たらハ何れもの何かと
仰られてハ如何なつうと御末へ参ふエイ是なる罍
炉裏に幸ひ火か有爰て火とろふ先炭をつかふ
ぐら／＼／＼さらはおこそふ ヲ、おこるハ／＼
まんまとおこつて御座るさらハくへませふヲ、／＼
火取れるハ／＼／＼ フラン是ハ如何事した、かに飛
て御座る芽を取てくふるをはたと失念のしためを
取てくへませふこれてハはねる事てハ御座る廻去ヲハ
火取ませふヲ、火取れるハ／＼／＼最前からか様に致
せはよふ御座つた物を火取れるハ／＼最前の所ハ大方
よふ御さるヲ、アツ手を焼たハ扱籠相な事しや扱も／＼
火取れたれば一入見事な栗しや最早無そふな
まんまと火取つて御座る急て持て参り御目に懸て
御感に預ふ扱も／＼心持能い事哉 ア、是を一ツ
心見をしたい事しやか乍去数の揃ふた物しや程に
念を入てと被仰たに依て如何な何とせふそ乍去
自然となたそ此中そちか方て喰た栗ハ殊の外風味

か能たか 汝は何と覺ると仰られた時いや何と

御座るをも存ませぬと申てハ如何て御座る其上壱ツ斗は苦しい御座るまい給へて見ませう去れハ申ぬ事か扱もくうまい栗しや最一ツ喰ふても苦敷う御座る

まい最一ツ給ふ是ハ手も放さるゝ事てハ御座らぬ最一ツ給ふ扱もくうまひ事しや一ツ喰二ツ喰皆に致た頼ふたお人へハ何と申上た物て御座ふそいやとこやらかお正直な程に面白おかしう申ないて置ふと存る申頼ふたお人御座るか御座り升るか いや太郎冠者が栗を火取つて参たそふな火取たかく 火取て御座るく

何と栗を火取て来たか 去れは其お事て御座る

御次へ持て参り火とろふと存て御座るか何れもの何かと被仰てハ如何しやと存ましてつゝとお末へ持て参り

まんまと火取まして是へ持て参れは太郎冠者

くと呼まするに依て後口をきつと見てあれハ

毛氈頭に戴き鬢髪に黒き髪もなし老人と老

女と夫婦来り給ひて我ハ是釜の神三十四人の父母

なり汝栗をくれいよ栗をくれたら富貴になすへし

と事委しくも宣へハあらとふとやと思ひて夫婦に栗

を奉るイヤ申釜の神の出させられて御座る はて扱夫

は目出度イ事しやよ 扱又跡かとくくと申程に立帰つ

て御座れハ何か三十四人の公達たちの唐子におくしを結せ

られたも御坐り又吹上にそろへさせられたお方も御坐つ

てやい

く太郎冠者と、かゝにハおまいらせてなせに童にハ暮ぬそ呉いくくと仰られて何か楓の様なお手を出させらるゝに依進せいでハ

成まして社能ふ社仰られた頼ふた人息才延命に守

らせいで進上くくと申て三十四人の公達達へ進

しまして御座る 夫は能ふ進しました残り有ふ程に

こちへおこせい 残りか何か有る物て御座りませふそ 先能

ふ聞け三十四人の公達達へ三十四夫婦へ式ツ残て四ツ有らふ

程にこちへおこせひ 夫ハ此方の算用か悪う御座る先

夫婦に式ツと仰られい 二ツ 三十四人の公達達へ

三十七八なれ

は残つて何か有物て御座るそ イヤく夫てハ算用

か合ぬ程に残つて四ツ有筈じやこちへおこせひ

慥其内に虫喰か御座りました 多ひ内しや程に

壱ツや杯ハ虫喰の有まい物てもなひ夫ならハ残て三ツ有

う程にこちへおこせひ 扱ハ此方にハ栗焼詞を

御存ないと見へて御座る いや知らぬよ 申て聞せませふ

急て云てきかせひ 畏て御さる 栗焼の詞にはく

逃栗追栗灰紛れとて三ツは失て候ハずお主ござの

御心中お恥しう候 なんてもなひ事あちへ

失ふ はあ また夫に居るか はあ

(加藤彩)

〔花盗人〕

花盗人

初二後見控ノ作物ヲ出ス舞台ニツツ割ニ大臣柱ノ方へ寄置正面ヨリ式尺程下座ヨシ

是ハ此隣て人に知られた花教寄な者て御坐ル毎も

春にもなれハ吉野初瀬醍醐山科祇園清水紫野

雲林院其外千本の花共を見物致ス爰に去ルお寺の

園に見事な花を持たれたを御存の方ハ次キ穂をほし

いと云て種々に申さるれ共殊の外おしめてやられ

ぬと申承ハ漸花も盛の由申間参りて余所作ミ

うと存ル先そりく^ジと参ふ誠古人の申置れた

は尤て御座る春の一時ハ千金にも替へしとハ花故に

社なれ我等躰のいやしき者迄も心慰はらす事て

御座ルイヤ何角と申内に則是じや每扉越に能見ゆるか不^マ

不思議や見へぬかとちへそ植替られた物て御座ふやあら

とこ許にあるそエイあれに木末か少し見ゆるか彼花そふ

な毎花の時分にハ是から能見へたか定て秘蔵召る、桜

じやに依奥へ植替られたと見へた是から少し木末か

見へてさへ各別な花て御座るに花の下へ^{モト}参て御座ふな

らハ嘸面白ふ御座ふ花のもとへ行道ハとこ元そいや此垣を

破れハは入るるか破たならハ自然人かとかめうかいやく

表迄ハ程遠イ事なれば垣を破たり共とかむる者もこ

さる廻去ラハ破り升う先結メを切ふ

さらハ垣を破ま升メリく^{カサ}く^{カサ}く^{カサ}

ま^{カサ}ん

まと破て御座る先垣を越ま升^{イヤアチト云ク、ハリ、トヒ越スアイシ舞台へ入} ハア

扱もく遠いから見たとは違ふて格別面白事て

御座る扱もく能咲た事哉先下に居て緩りと詠

ま升^{トクニ二腰ス} 扱もく見事な事て御座ル誠に南

枝初開と申か南の枝ハ咲に咲て少し盛も過時分

しや西の方の枝ハ今か盛て御坐る北へ延た枝ハ少シツ、開

く躰て御座る是ハ心面白事哉花によそへて^{サリト詠也}諺ま升

あらく面白の千ミの花の木末やな桜の木間

すき間なく雪ぞ降りつむ嵐のさそふ花と

連て行や心なるらんさそなにしおふ花の都

の安太郎実時めけるよそおひ青陽の陰縁にて風

長閑なるお庭の桜盛にてくり返しかへし

見ても面白やおもしろやな千ミの木末の花の色

そ移れり^{右讀サノナ、ニシツ、アタリ新 発意幕ヨリ出} 荒不思議や殊の外花

園に諺声かするか合点の行ぬ事て御座る是ハ如何

事盗人かは入た申くお住寺様く盗人かは入ツて

御座る早ふ出されられい^{住寺衣ノカタドリ布ニテ シハリ智ツキ出ル也} やあく盗人

かは入ツた へ中々 へ能ふ知らせたやい新発意共花

盗人か這入た程に棒を持って出合く^{新発意幕ヨリ 三人竹ヲツキ出ル}

申く盗人かは入ツて御座るか^{住寺 中々} ツレ皆とこ元に住

りま升るそ^{住 皆是へ来く} 心得て御坐ル^{ト云佳等 舞台へ}

やる事てハ無そ^{出ルモノノ新発意太鼓座へ行 竹ヲ後見ヨリ取ツレ末ニツキ出ル 住 やい} 盗人よのかす事てハ無そ

やる事てハ無そ^{シテヤイノヲ開作物ノ脇へカクル アト皆ミワキ正面へ出竹ツキ並} 荒不思議や今迄

爰にいたかとちへいたそ 四人去れハとちへ參り升たそ ト云

タイ佳等モ同斷 住 やい／＼あの花の影に居るか盗人さふな 少サカス

皆 実とあれに居ま升る 住 やい／＼おのれのかしハせぬそ

ト云棒ヲ 申ミ私ハ盗人テハ御坐らぬ花見に參つて

ト云棒ヲ 住 己斷も無には入て盗人テハ有廻かやい／＼

繩を掛い／＼ 心得て御座ル ト云モノフシンボチ後見廻り

ト云棒ヲ 皆 皆／＼おりやれ／＼ 心得た ト云皆ミシテソハハ かつきめ

退す廻そ ト云繩ヲ掛フレ作物 申ミ私ハ花見に參て

御座る程にゆるいて被下い 住 花見には入ツたと退す事

てハ無そかくこうせい なにしに覚悟をするの

せぬのと云事が御座らふか盗ミでも致ていましてめられた

らハ面目なふも御座らぬか花を見に忍ひ入ツたれば

しも苦う御座らぬ煙霞埋 シテ 跡ヲ惜ム花暮 左黒捨 テ 身ヲ

不待タ春 ヲ と古へ唐土の花に而已詠 メ 入峨 ミ たる

谷へ落て空く成るまして此日本の花の安太郎ハ花故に

身を捨ルと思へは露ちり程も命ハおしまぬそ

住 やい／＼今のを聞たか盗人とハ思へ共こひた事云う

者じやな ヲモ 仰らるゝ通やさしい事を申者て御座る

住 何と思ふそ心やさしい者なれハ命を助て酒の伽に

せうと思ふか何と有ふそ ツレ 是ハ一段と能う御坐りま升

喃 ミ むかつの人のよふに思ふたか心かやさしい人しや

最早繩を解て免ルそ シ いや／＼花故なれハ苦敷

御座らぬ 住 おしやるハ尤なれ共愚僧も花数寄其方も

花をすかせませハ料とハおもわれぬ夫に付て身共は

哥の上の句を思ひ出た程に此下の句をわこりよお付

やれ句柄が出来たならハ命を助けふ 只今も申

通命を惜む事はなけれ共数奇の道なれば少ト

案て見ま升して其上の句ハ何とて御坐る 号も

おりやらふか シ 何とて御座る 住 此春ハ花の下 ト云

繩付ぬとハ何とおりやらふ シ 是は面白御坐る

住 さあ／＼下の句を付さしませ シ 何とか能御坐ふそ

何とか能かるふそ 号も御坐ふか 何とておりやる

烏帷子桜と人ハ云なり 住 是ハ面白御坐ル

やい／＼繩を解てやれ 皆 畏て御坐るさあ／＼繩

を解て助させらるゝ ト云竿 是ハ難有存升ル ト云テ苗

住 喃 ミ 某も花を詠酒を呑ふ程にそなたもお呑みや

れ シ 夫は嬉敷存升ル 住 先下におりやれ シ 畏御坐る

新發意盃を持て来 ヲモ 畏て御坐ル 後見廻へ 此上ハ互に

とふかんのふして心安う咄うそ シ 夫ハ忝ふ御座ル

お盃を持まして御坐る ヲモ 先其方お呑みやれ シ 先

此方初メさせられい 住 夫ならハ某の呑ふか シ 能ふ

御坐りま升 ト云 此盃を其方へおまそう シ 頂ま

升 住 あれへ持て行ケ ヲモ 畏て御座ル ト云 丁度お吞

やれ シ 下されま升 ト云 少ト謡ま升 住 能おりや

ろふ シ 申花香を請吞ハ一入酒もうもふ覚升ル 尤て

おりやる最一ツ呑しませ シ 何か扱給ま升 ト云ツキ新
同ホツク調書

此盃を此方へ進ま升 住 こちへおこ差ませ シ あれへ

持て御座レ ヲモ 心得て御さる シ 此方にも丁度参り

ませい 給う共 ツク調 此盃をそちへさす 私 の頂

ま升 皆ヲ新發意酒ツクヨハシ
皆同小調クモヨハシ 至段ニ新發意
へサシヲ新へ蓋ヲ遣ス
時二三新立ニ立酒ツク
トリ酒吞カ、ルト
住持へ進スニ、新約スル
同事同事住持登

申お着に少ト舞ま升か 住 能おりやるふ舞しませ

心得て御坐ル ト云出ス扇ヲヌキ持立テシテ小寄
花ノ枝ヲテイヨリ 上の枝には。

鳥か住やら花か散り候。いさ、らハ 扇ヲ開右ヘサシテ
左ニテアツ 鳴子を掛て

花の鳥を追ふ 皆、 ヤンヤ〜〜 住 是、舞ハ面白

か鳥を追し升扇子風かさわるやら花散そや

水ヲを結ハ月も手に宿る。花を折ハ〜

香衣に 移る 習ひのそろ者を袖を引てとかむるハ。

あらつれなやの 皆、 ヤンヤ〜〜 住 是ハ面白事ており

やる是を肴に最一ツ給へう シテ よふこさらふ 酒ツク調
同事

此盃を又其方へおまそふ シ 戴ま升 住 あれへ持て

行 ヲモ 畏て御座ル 住 丁度呑しませ シ 給ま升共

りま升 中佳調 桜を見れば春毎に花少しおそけれハ。

此木やわふると心をつくしそたてしも。是ハ常

なき我為の家桜と名付て秘蔵なすと思召を

偕先ハ白妙に。枝を垂葉を隠し重りあへて花

咲し其色今ハ深して爰ハ元より花園の家桜と

ハ理りや皆寄ていさや酒呑ん余所にあるまし桜

成能寄て詠たまへや シテ ヤンヤ〜〜 扱も〜面白

事て御さる是をお着に最一ツ給ま升 住 のましませ

此盃を又此方へ進ま升 住 こちへおこさ

しませ 至段等ハ持酒ノム
前ノ通住持等酒ノム 住さあくそち達も呑め

心得升た 皆、扇ハ酒ヲ受ム皆、
香切ワキベテ後見トル シテ又お着に舞ま升 住 能ふお

りやらふ シテ 此度は地を謡ふて被下い 皆、 心ておりやる

霞の光り月の影。何か今宵の思ひて

ならん去乍あハれ一枝を花の袖に手折て月を

も友に詠めはやの望ハ残り此春の望残り ト云乍
花ヲ

己ハ憎ハ奴のやい〜花を折ルとらへい

あの大擲者只置事てハ無い シテ 真平免て被下い〜

人ハ無かとらへて呉いやるまいそ〜

(近藤愛)

〔八幡の前〕

八幡前 鬘舞台真中正面へ出テ名乗太郎冠者
座テ出太鼓座二屋又敷手付出前座ノ上ニ
座テ出太鼓座大木小ノ方ヘヨリテ座ノ成リ

是ハ八幡の山下に隠れも無大果報の者て御座る

存る子細の御坐る間高札を上ふと存るやあらとこ

許かよふ御座らふぞ ツメル
ト云シテ柱
ヲ見テ いや爰許か能御座

うそ ト云候中より礼ヲ出ステイスル
シテ柱ヘ打ルテイ扇ニテニツ打膝ヘ下リ 見た所か一段と能い

太郎冠者ト云々大臣様ノ方行居るかやい はあ 有か お前に

汝を呼出すハ別の事でもない高札の表に付て
と有て見馴ぬ人のわたせたらハこちへ知らせひ

畏て御座る ト男御座へ下居ス シテ出シテ名乗 是ハ此

隣の者て御座ル此隣近ひ八幡の山ト云々下下有徳

人の御座るか男子にも女子にも独の秘蔵娘を
持れたるに付て何者にハ寄ましい芸能の達シ

たる者を聳に取うするとの高札トを上たと

申程に先あれい参り様子を見うと存ル誠に

珍い取沙汰て御座るか様の事にハ得て風説か

有たかる物て御座るか偽てハ無か知らぬ参た

ならハ様子かしてゝて御座らふいや何角と云内には

ハ早山下近くて御座るか何方に高札を建られた

事しや知らぬ ト云々シテ 去ハ社疑も無事て御座ル

何々何者に寄まし芸能の達たる者を聳に

取へしホウ是ハ疑も無事て御座るいや誰しも

望に御座る程に先高札をハ某の引て参ふ

と存る ト高札ヲトリ懐中スル 扱高札ハ引て御座るか身に

付て芸能の覚もなしやあら何と致ふそイヤ

爰に別而お心易ふお目を下さる、お方が御座る程に

是へ参り談合致ふと存ル常々御心易ふお目を

下さる、お方で御座る程に此事を具に申て御座

らふならハ能様に被成て下されぬ事ハ御座る舞

と存る辞参程に則是しや物もふ案内申

教手 ト云々立止 イヤ表に物申と有ル案内とハ誰そ物もふとハ

私て御座ル ト云々ト先へ出ル 教 是ハ能ふ社おりやつたれ ト云々 此間ハお見

舞も申ませぬか弥替らせらる、事も御座らぬか

教手 中々替事もない其方ハ方々をする人じやか世間に

何を珍敷イ取沙汰ハ無か いや別に珍敷イ取沙汰

御座らぬか高カ札カの事をハ御存て御座るか ヲ、高カ札カ

か上たとやらハ聞たか委敷事ハ知らぬよ ト云々 いや別の

事ても御座らぬ此隣近ひ八幡の山下に大有徳

人の御座るか御存て御座るか ト云々 あれハ人の知た手前

者ておりやる ト云々 其有徳人の男子にも女子にも

独の秘蔵娘を持れたるに付て何者にハ寄ま

しい芸能の達たる者を聳に取らするとの高ウ札ウ

を上たと申升るか何と珍敷イ取沙汰てハ御座らぬか

教手 へ誠に是ハ珍敷取沙汰ておりやる果報強ひ者か聳に

成ておりやらふ ト云々 ひくの厚ひ者か聳に成て御座

り升う ト云々 教手 ア、世か儘ならハわこりよをあれへやり度

物じや ト云々 何と仰られ升ル ト云々 いやわこりよをあれへ

やれハ一代楽々と濟事しやとの云事ておりやる

シテ へ夫ならハ私をやらせられて被下ませひ ト云々 教手 やらせ

られて被下と身に付て芸能の覚も無何と

やらる、物しや ト云々 夫ならハ何を隠ま升高カ札カをハ

私の引て参て御座ル ト云々 教手 爰な人か又され事をおし

やる シテ され事てハ御座らぬお目に掛ま升

教手 夫ハ心実引ておりやつたか シテ 中々心実引て参て

御座る 教手 はて扱わこりよハむかつな人しや

身に芸能の覚もなふて高カ札ヲ引と云事

か有物ておりやるか シテ 無用と思召ならハ又持居て立て

置ませう ト云言ふトスル 是々先おまちやれ 何事て御座ルそ

其高カ札ヲを引時に誰も人ハなかつたか 大勢の

見物て御座りました 夫お見やれ其大勢の中で

引た高カ札ヲを今持て行て立れハ二倍の恥と

云物ておりやる 左様て御座る 又わこりよか某

所へ心易ふ来ると云事を誰知らぬ者もないか様の

事を打捨置テハ某迄も不甲斐ない者の様に思わ

る、か何卒分別として見差ませ 能様に被成

て被下ませひ 教手 わこりよハ何も芸能の覚ハ無

の シテ 何も覚ハ御座りませぬ ヲシヘ 何としたならハよ

からふぞ辞喃々其方ハ盤将杯ハならぬか シテ 盤将

と被仰る、付て思ひ出て御座ル碁ハ少と打升ル

教 夫ハ一段の事しや何程打し升 シテ 何程と

申事ハ存ませぬか先白と黒との石を盤の上へ

ならべル事ハ並升ルか生死とやらハ存ませぬ

教 生死を知らるて碁を打て有て社 シテ 左様て

御座り升ル 鞠ハならぬか 是もお若衆遊すに

依て詰を致てこさるか私の鞠ハ空へはあかり

ませいて脇へつ、つとそれ升ル 何しやそる、

中々 是も用にハた、ぬはて扱わこりよハ何

から何までも不調法な人ておりやる 申々

私は弓を少と射升ル 夫ハ一段の事しや何程

射さし升 ス 是も何程と申事ハ存ませぬ

か幼ひ時分浜弓をハよふ射まして御座る

浜弓を射るを弓を射ルてハ有てこそ シテ 左様て

御座る 教 はて扱其方ハ何から何迄も鈍な人て

おりやる シテ 能様に被成て下されませい 教 いや喃々

わこりよか浜弓を射ると云に付て思ひ出た其

方を弓の射手歌人者にしておませふ

シテ 夫ハ忝ふ御座る 教 先あれへ弓矢を肩けており

やつたならハ定て弓の射手しやと思ふて何そ

所望するておりやらふ シテ 所望致て御座りませう

其時其方のおしやらふには四半丸物下針の類は

大方こふしの極た者て御座る程に掛鳥か走り

物を仰付られい致ふとおしやれ 左様に申て

苦數御座らぬか 中々苦しう無扱ハ歴々の射

手しやと思ふてあの辺ハ水辺てハ有定而浮鳥か杯

を所望するておりやらふ 左様て御座り升う 又わこ

りよか何程睨ふたりとも中りハせまひ いかな側へも

参り升舞 わこりよの弓を射と云事を聞たならハ

大勢の見物て有ふ シテ 大勢の見物て御座り升う

教 其大勢の見物の中で射をこなわしましたならハ
 皆かとつと云て笑ふ シテ 笑升うとも 教 其時其方
 のおしやらふにハ余りなおわらやつそ一首浮ふたと
 云て歌を讀しませ シテ 歌とハ小哥の事で御座るか
教 いや〜其様なむさとした事でハ無三十一字の云の
 葉をつらぬる歌の事しや則其歌はいか斗神も嬉
 敷おほすらん八幡の前に鳥居立たりと其心ハ
 此中八幡に新敷鳥居か建た其鳥居の事と今
 又其方か鳥を射立たと云事を引添へておしや
 つたならハ智殿ハ弓の射手歌人者しやと云て
 聲に取ておりやらふ 鳥居建たり鳥射立
 たり先ハ面白さふな歌で御座るして是ハ誰か読
 升る わこりよの讀し升のておりやる 私一人て
教 おんても無事 如何な〜二日三日稽古致ても中々
 独やなとて読事ハ成升舞 何しや読事ハならぬ
 中々 はて扱夫ハ気毒な事しや何とぞして読
 せたい物しやかかふ〜脇から頭字を云たならハ読し
 升か 頭字を被仰たらハ読事も御座り升う
 夫ならハ某の能時分に見物に紛て居て側から頭
 字を云程に讀しませ 夫ならハ読ま升扱私ハ最
 早号参り升る おりやらふか 中々 二人 さくらハ〜
上目付
柱の方付
ト云 是〜先おまちやれ 何事で御座るぞ 其鉢
 てハ如何な弓矢をかしておまそふ夫にお待やれ

心得升て御座る ト云 教手前座へ行後見より弓矢ヲ讀取申サシ 是ハ
 弓矢を持しませ 畏て御座る ト云 弓矢ノ手ニ持ル 矢を持添
 さしませ ト云 矢ヲ左ノ手持添ル也但素袍ノ時ハ 素袍ノ時ハ手ニ持也
ト云 矢ヲ右ノ手持添ル也
 と持振が能おりやる 夫ならハ参り升ル程に追付御座て
 被下い 中々行ふ程に早ふ行しませ 号参り升ル
 おりやらふか 中々 さらハ〜 忝ふ御座る 能お
 りやつた はあ ト云 目付柱ノ方へ行詞 扱も〜嬉敷事
ト云 手ハ太鼓座へ行座ス
 哉私の様な無手成者を弓の射手歌人者にして
 下さる、様な大慶な事ハ御座て社先急て参ふ惣て
 聲入と申者ハ人の見たかる物で御座るに定而舅の
 方にハ大勢の見物で御座ふと存ル程に則是しや
ト云 二テ立留舞台ノ方ヲ向案内
ト云 行大小ノ前より橋掛り
 物申案内もふ 太郎立テ 辞表に物申と有る案内とハ誰
乙 ト云 物申ト有る案内トハ誰
ト云 物申ト有る案内トハ誰
 させられて御座る 高札の表に付て参つたとお
 しやれ 其通りを申升ふ夫に少ト待せられい 心得
 た 如何に申高札の表に付と有て見馴ぬ人の
 お出て御座る 何しや高札の表に付と有て見馴ぬ
 人のわせた 中々 行て云ふにハ高札の表にハ一芸
 有お方をと立て御座るか旁にハ何を遊すそと云て
 問ふてこひ 畏て御座る 如何に申舅被申升ルハ
 高札の表には一芸有お方をと立て御座る旁には
 何を遊すそと被申升る 芸能の事ておりやるか
ト云 芸能
ト云 芸能
 中々 芸能〜 畏て御座る 如何に申

何事しや 左様に申て御座れハ弓矢肩けて一遍

廻らせられて御坐る 扱ハ弓の射手と見へる行て

□ふにハ何そ一手遊されい見物致ふと云へ 畏て御坐る

何そ一手被遊ひ見物致ふ被申升ル 四半丸物下ケ針

の類ひハ大方こふしの極た物て御座る程に欠鳥か

走り鳥を仰付られい致ふとおしやれ 畏て御坐る

ハア左様に申て御坐れハ四半丸物下ケ針の類ハ大方こふし

極た物て御坐る程に掛鳥か走り物を被仰付い致ふ

と被申升る 扱ハ歴々の射手しやと見へた又行て

云へ ハア 隣近ひ放生川へ同道致し浮鳥を所望致

う程に号通らせられいと云へ 畏て御坐る如何に申

舅被申升ル隣近ひ放生川へ同道致し浮鳥を所

望致ま升程に号お通り被成いと被申升ル 夫ならハ

通ふか 能ふ御坐りま升 其方ハ是の者か 中々

是の者て御座る シテ大儀しやよ 太ハア シテ少トあちへも

いらへい

畏て御坐る 不案内に御坐る 初対面に御坐る隣近い

放生川へ同道致浮鳥を所望致ふ程さあ〜御坐れ〜

心得て御座る あの内ハ殺生禁断の所て御坐れ共

か様の事にハ苦敷御座る舞 実と苦敷御座る舞

参る程に是ハはや放生川て御座る 実と放生川

て御坐る 何と夥敷浮鳥てハ御座らぬか 誠に

夥敷浮鳥て御座る さあ〜あの中を遊せ

尤致ふかあの多い中を致てハ自然に当たと

思召ハ如何て御座る逆の事に矢つほを好せられい

是ハ尤て御座る夫ならハ矢つほを好ま升あれ〜

あれ〜大むれか参る 中々参りま升 跡から三連

か参る 中々参りま升 あの中なを遊せ 心得て

御座る△ 此印ノ所直藏ケ 彼人か待兼て

居られう程に急て参ふ扱も〜夥敷見物哉云

△エヘン〜 ト呼掛ヲ聞テハ右へ廻リテ

先弓 矢を下二置しませ 片ヒサツキ居ル 肩を脱しませ

左りの肩を脱しませ シテワラヌク 弓矢を持しませ

そちらへ持しませ 左ワラ 矢をつかわしませ

そちらをこちらへつかへさしませ 誠ニツカヘル

早ふ行て射さしませ 先出テ言葉 誠ニツカヘル

やい太郎冠者早ウ射させられい

と云へ 畏て御座る 片ヒサ付テ向 如何に申 何事しや 早ふ

被成いと被申升ル 唯今致すとをしやれ 畏て御坐る

只今致と被申升ル 何をしていらる、事しやしらぬ

更ハ射まする 早ふ遊せ イヤア 三三へん離テ射ル也 エイ

笑 エヘン〜 ト呼掛ルシテ急テシテ柱、 太郎冠者

何として射よふと思ふて射手しやおしやるそ恥し

うハないかな 左様て御座りまする 余りなおわらや

そ一首浮ふた 余りなおわらやつそ石か浮ふ

た やあ〜何と〜 エヘン〜 初ノ通 余りなおわらや

つそ一首浮ふた ウシテウツク 余りなおわらやつそ一首浮ふた

余りなおわらやつそ一首浮ふた エヘント云テ直ニ初ノ通シテ柱ノワキヘ行

やい太郎冠者聳殿ハ歌を讀るゝと見へた ト云テ直ニ左様で

御座ります 本殿裏ハ引居ス如何斗 シテウツク如何めしい やあゝ

何とく エヘンく如何斗 シテウツクいか斗 舅吟スル

エヘンく神も嬉敷と思すらん 神くく やあゝ

何とく エヘンく神も嬉しと思すらん 神も

嬉しとおほすらん 舅吟スル エヘンく八幡の前に

八幡か前に やあゝ何とく エヘンく八幡の前に鳥

居立たり ト云直ニ八幡の前に 舅吟スル シテ初ノ通シテ

かとちへ行れたしらぬ ト云直ニ少ト吟して見

ま升如何斗神も嬉しと思すらん八幡の前にく

是ハ面白お歌で御座る定て此先か聞事て御座らふ

早ふ仰られいや申くく 喃くく のふとちへ御坐ル

そ是へ御坐れ ト云直ニ何事て御座る今のお歌ハ殊の外

出来まして御座る定而此先か聞事てこさらふ早ふ

仰聞られませひ 今の歌先か何か御坐ふそ

夫てハ歌か短ふ御坐る 何しや短 中々 短くハ

八幡の前にと引くお続やれ 夫てハ文字か足ませぬ

何しや文字か足らぬ 中々 文字か足らずは

安い事八幡の前に八幡の前にくと能様に足て

お読みやれ やあら爰な者ハ人を颯る様な事

をおしやる此先をおしやらねハ跡へも先へもやらぬかてい

とおしやらぬか あいたくく やあら何とやら云れた

が申く今歌の先を思ひ出て御座る 何とく

物と 何と 物と 何と 八幡の前に 八幡の前に

八幡の前に ト云テ先ヘ出ルとふかめ射立た なんても

無事とつと、お行やれ 面目も御坐らぬ

あのやくたいなし はあ ト云テ先ヘ出ル

(名倉ミサ子)

〔鐘の音〕

鐘の音

是は此隣之者て御座る 召仕ふ者を呼出て談合

致ス事か御座る 太郎冠者居るかやい はあ 有か

御前に 汝を呼出すハ別の事てもなひ 忪も

余程成人したに依て腰の物を捨て遣

そふと思ふか何と有ふそ 御意の如くお

生二成たハ今日此頃の様に存ましたに早

余程御成人被成てお腰の物を御拵被成て

進せらるゝ様なお目出度い事ハ御座りませぬ 併あれ

程よいお腰の物か御座るにまた其上にも御拵被成

まするか 能い腰の物とハとれか有そ 常に指

せらるゝ赤下緒の御刀ハ結構な御拵て御座りま

する 汝ハむさとした事を云あれは菖蒲刀
と云ふて子供の指習ひの刀で役に立ぬ 今度
は金ののし付ケにして取らせうと思ふ程に
汝ハ太儀ながら鎌倉へ行て金の直を聞てこひ
畏て御座る 早ふ行てこい待て居るそ はあ
是は不思議な事を被仰付た先急て参ふ
刀をお拵へ被成るゝに鐘の音を聞合せいとハ合点
の参らぬ事じやか立帰て今一度承らふか いやゝ
早ふ行てこひと仰られたに戻つたならば却而
御機嫌かわるからふ いや何かと申内に程なふ
鎌倉しやとれから行ふそ 先寿福寺の鐘を
ついで音を聞ませう 則是か鐘樓堂しや されは
撞て見ませう 鐘ラツクしやくわんゝゝ 是はわれ
鐘じや音が能くない又外の寺へ参らふ 今度は
円覚寺の鐘の音を聞て見ませう 行程に
是しや ア、見事な形りの鐘て御座る いか様是
は音も能ふ御座らふ 更はつかう 始通リツク
コンゝゝ笑 是ハ如何な事 見掛と違ひて
音か少さい乍さ半鐘の様で御座る 是ハ御意
に入まい 是から健長寺へ参ふ 鎌倉中の
寺を欠廻つたならハ能鐘の音を聞ぬと
云事ハ御座るまい 是は早健長寺で御座る 是ハ
又境内も広しお寺か廻らんなれば鐘樓堂

迄か立派で御座る 龍頭の合好地紋金色と
言どかう申されぬ事じや 先ついで見ませう
シヤモンゝゝ 扱もゝ能いひゝき哉 急て罷
帰り此由を申上ふ 鐘の音ハとれも似るかゝ
御座る 道理で聞合てこいと御意被成た 参る程に
是しや 申頼ふたお人御坐るか御座りまするか
いや太郎冠者が戻たそうな 太郎冠者戻つたか
御座るか 戻つたかゝ 只今帰て御座る 何と
言付た金の直を聞合て来たか されハ其
御事で御座る 随分方々を欠廻り寺々の鐘の音
を聞合て御座るか中にも健長寺の鐘ハ音と
申響と云最早是に続く鐘は外に御座りますまい
己夫ハ撞鐘の事てハないか 中々つき鐘の
事て御座る 是は如何な事扱もゝ
鈍な奴じや 太刀を作るに撞鐘の音か何の用に
立物じや 金の直と云ふたわいやい 金ならハ
こかねと初から仰られたか能ふ御座る また
ぬからぬ顔で口答をしおる あちへうせう ア、
ア、とハ憎イ奴の 失おるまいかゝゝ 参りま
するゝ 申は是ハ何事を被成るゝ 先堪
忍をさせられい 何と致た不調法で御立腹を
被成て御座るぞ 先聞て被下い 世忤に腰の物を

拵へて遣せまするに依て鎌倉へ行て金の直を

聞合てこいと申付て御座れば寺々の撞鐘の

響を聞合て參て何んの角のと口答を申に依て

腹か立事て御座る 是ハ御立腹被成る、ハ御尤て

御座る 扱もくどんな者御座る 參つてしかりま

せう やい太郎冠者 面目も御座りませぬ

腹立召る、社道理なれ 何とてうつけた事を

申上たそ イヤ私斗りわるいても御座りませぬ

頼ふたお人にも不念か御座り升る 金の直とハ仰られ

ゐて唯鐘の音と斗申付られたに依て撞鐘の音

の事かと存て聞て參て御座る いやく夫てハ訳か立

ぬ 刀を作るに撞鐘の音か用に立物か 何卒して頼ふ

た人の機嫌の直す様にせい 何と申上たならハ御

機嫌か直りませうそ 如何様にも分別をして

見よ 申思ひ出いた事か御座る 頼ふた人ハ常々謡か

お数寄て御座る程に私の不調法て承つて參た撞

鐘の音の様子を謡申作て謡ふて御機嫌を取ませう

か 是ハ何と御座り升うそ 是ハ面白イ分別しや 先

其通りを言て見う 宜しう頼上まする

申々呵ましたれは御意を背たと有て殊

の外迷惑かります夫に付て不調法を致て寺々

の鐘の音を承つた様子を謡に作てお慰に入ふと申

程に聞せられまいか 余り聞度ふも御座らねとも何

角とお取持て御座る程に此方にめんして聞ませう

是へ出て謡へと被仰い 夫ハ某迄も満足致た謡せ

ませう やいく大方機嫌も直た程にあれへ出て謡へ

先以御取なし忝ふ御座る 更ハ謡ませう

謡先鎌倉につくと入相の鐘是なり 東門に

当りてハ寿福寺の鐘諸行無常とひくくなり

南門ハ円覚寺是生滅法とひく成 扱西門ハ

極楽寺生滅々知の断り 北門ハ健長寺舞滅

為楽とひく、けハ何れも鐘の音聞すまし

夜ハほのくの明けれハいわで登るか立帰り 小町

にて子持か母の土産に紅皿壺ツ買持て急て

帰る甲斐もなく さも荒けなき主殿にそ首

をとられ撞鐘のく響に花をそ直し

ける 一段と能ふ謡たいそこちへこゝ

畏て御座る

(狩野一三)

〔惣八〕

惣八

是は此隣の者て御座るか様に国土安全に納る御代

なれば彼方此方のお付合に料理人か御座らゐて不

自由に御座るに依料理人を壱人抱ふと存る又似合ぬ

申事てなれ共知職の教化により持仏堂を建立致

て御座る朝夕の勤は申に不及家内繁昌災難の来らぬ様に出家を壺人抱経を読せふと存る先高札を上ふとこ元か能ふ御座らふそいや爰許かよふ御座らふ

見た所か一段とよい 是ハ此隣の出家て御座る某元は料理人て御座つて爰かしこを懸廻り料理を致て御座れ共近年殊の外手前不如意に罷成渡世か

成ませぬに依か様にさまを替へ出家にはなつて御座れ共いまた経陀羅尼をも覚ませぬに依て檀那寺を頼んで這入ふか組入諸国修行ても致ふかと思案を致す

所に爰に大有徳人か御座るか出家と料理人を抱させられうと有る高札の上つたと申程に是へ参らふと存して罷

出た先急て参らふ此度あれい参つてさへ御座らふならハ随分学文に情を出し経をも読習ふと存る参る程に是しや物申案内も う いや表に物申と有る案内とハ

誰そ物申とは是ハ見馴ぬ出家しやか何かたからおりやつたそ 此隣の出家て御座るか高札の表に付て参つて御座る 夫ならハ抱ふか云迄ハなけれ共何経成共

合点ておりやるか 其心得て参つて御座る何経成とも読まする 夫ならハ抱ふ号お通りやれ 心得て御座る夫にとふとおりやれ 心得まして御座る 是此隣て

名をは惣八と申者て御座る某元は新発意立の出家て御座つたか経陀羅尼ハ申に及す学文迄随分情を出し

恐らく存せぬ事ハなけれ共何と致てやら仏道修行か

心に染ぬに依てか様に元結いたし名を惣八と改てハ御座れ共渡世をいとなむ業を存せぬに依て何と致さふかとつゝ、追つ分別を致す所所に爰に誰と申て有徳人の御座るか出家と料理人を抱へさせられふと高札を上られたと申程に何も存ねとも料理人に成て参ふと存して

罷出た先急て参ふ此度あれへにじりかふてさへ御座らふならハ手前者の事なれば料人も御座ふ程に見習ふて覚ふと存るいや参る程に是しや先案内を乞う物申案内もふ 又表に物もふと有る

案内とハ誰そ物もふとは 私て御座りまする 是ハ見なれぬ人じやか何方から来たそ 私ハ惣八と申料理人て御座るか御高札の表に付て参つて御座る

何とおしやる惣八と云料理人しやか高札の表に付て来たさ様で御座り升る 扱云迄ハなけれ共料理ハいか様の事ても成て有らふ 其心得て参りました何料理

成共仕りまする 夫ならハ抱ふ程に号お通りやれ 畏て御座る兩人共に抱て御座る面々の役を申付ふと存ル喃く

御坊其方の前なハ持仏堂しや朝夕の勤ハ申に及ばず家内繁昌悪事災難の除様に此経を読んでおくりやれ

畏て御座る是ハ何経て御座り升る 是て夫ハ忍王経ておりやる 誠に忍王経て御座りまする 居間へ聞ゆる様に高らかによふてたもれ 何か扱畏て御座る なふく

惣八晩程客来か有程此魚をりやうつてたもれ

畏て御座る此赤いは何とやら申ました はて扱夫ハ

鯛ておりやる 夫々鯛て御座りました 此黒いハ何やら

て御座りました はて夫ハ鯉ておりやるハいの 如何に

も鯉て御座りました扱何に仕りまする 其鯛をハ汁

にする程に背切りにしておくりやれ 畏て御座る 又鯉ハ

指味にする程にいかにも細作りに手際よふさしませ 何か扱

畏て御座る 随分早ふ出来る様に頼むぞ 畏て御座る

扱是ハ何経しや知らぬ何と讀ふた物て有ふそ一字も

読らるゝ事てハなひ先紛かして読ませう 扱もく迷惑

な事しや行々見習ふてから致そふと存たれハ此様に早速申

付られふとは夢々知なんだ先かふはやさふか いやく真式ツ

に切ふ 先苔をふけく苔をふいたら魚頭を

つげくいやなふく御坊 何事ておりやる

卒爾な申事なれと最前から経を讀しますかと思へ

ハ何とやら料理の指図を召るゝ様に聞ゆるかさ様て

おりやるか 最前から見て居れハ其方ハ料理人さふな

殊の外不案内そふな程に慮外ながら笑止に思ふて差

図を致す事ておりやる 夫ハ先過分におりやる乍去

其方ハ出家に似合ぬ魚類の差図を召さるゝハ何とも不

思儀なかいかな事ておりやるぞ 不審尤ておりやる夫ならハ

何を隠ふそ某元ハ料理人ておりやたか何か方々

を欠廻り料理を致した処に近年手前不如意に罷成

食かならぬに依て俄に出家に成たれ共何も存せぬに依て

檀那寺を頼ふか諸国行々修を致ふかと存る所に爰元て

出家を抱させられふと高札と上ツたを幸ひに是へ参た

か俄に経を讀メと申付られて迷惑致す事ており

やる 様子を聞ハ尤しや夫ならハ身共も懺悔致て

聞せませふた、い某ハ元新發立の出家ておりやつたか

經陀羅尼ハ申に不及学文迄も随分情ヲ出ており

やれ共何とやら仏道修行か心に染ぬに依不図元俗

致したれ共渡世の業を存せず何と致ふかと思

案をする処に爰元て料理人を抱ふと高札の

上ツたを幸ひに料理人に成て参ツたかいか様見習ふ

てから致ふと思ふた処に此様に急申付られて殊の外

迷惑致す事ておりやる おしやれハ尤ておりやる

扱少と相挨か有る幸ひ誰見る者もなひ程に其経を

某か讀ふ程に其方はをちよつと料理つておくりやれ

其方ハむざとした事をおしやる出家のなりて何と魚か

料らるゝ物しやぞ はて扱律儀な事をおしやる兩人

より外に見る人もなひ程に平に料理つておくりやれ

夫ならハ料理つておまそふ去ながら此躰てハ如何ないや

是に幸ひしゆ中か有る是て肩を上てたもれ シテハ心得た

よふおりやるか 中々能ふおりやる先此経を渡す程に高

らかに讀ふてたもれ 心得た 扱此経を何経しやと思し

ますそたしか仁王経とやら仰られた いやく

仁王経てハない是ハ忍王経といふて祈禱第一の経ておりやる
夫々其忍王経ておりやるおりやつた 此様な経をハ逆様にも
読事じや さふ有ふとも随分高らかに読しませ
心得た 何とたて板に水を流す様におりやらふ いさき
よい事ておりやる さあ〜早ふ料理ツてたもれ
心得た扱料理には習の有る事じや先魚を洗ふて
真那板を引寄惣して海の前川の後といふて此鯛ハ
海の魚なれば腹を前にして先こけをさつ〜と
ふく事じや ヲ、皮をむくハ〜 いや〜皮をむく
とハ精進物の事じや魚類ハ鱗とも苔とも申する
尤じやよ 扱魚頭をついて かふを切るか 笑いや〜
是もかふとハ云ぬ魚の頭と書て魚頭といふ 何じや
魚の頭と書て魚頭 中々よふ覚さしませ 心得た
扱此鯉もうろこをふいて前通扱此鯛をハ何にせむ
と仰られたぞ 其赤のか 中々此鯛ておりやるわいの
夫をハ汁にすると仰られた 扱料理にお好ハ
なかつたか 何とやら仰られた汁にする程に夫々輪切にし
てとやら輪にはやしてとやら仰られた 何しや輪〜笑
夫に精進物の事じや汁ならハ背切ておりやらふ 夫々
其背切て有ツた さあ〜経を読しませ 心得た
扱此鯉ハ何にするのじや 其黒いをハ何とやら仰られた
夫々さ、かしとやら仰られた 何じやさ、がし〜
笑夫ハ差身てをりやらふ 夫々指身ておりやる

是もお好ハ無ツたか 夫も細〜こま〜とやら
仰られた 笑是ハ鯉しやに依て定て細作りて有ふ
其細作りてあつた さあ〜高らかに読しませ
心得た 両人の者に役々を申付て御座るか最早
料理ハ出来たか知らぬ参つて様子を見ませう是ハ如何な事
扱も〜腹の立事哉某はだまされた料理人か経を
よミ出家が料理を致す扱も〜憎イ奴哉やい〜
己等ハ憎奴の夫ハ何事じや鯛てハないか 出家誠に鯛て御座る
憎イ奴の只置事てハなひそ 真平免て被下い〜
やいそこな奴夫ハ勿躰なひ経てハないか 誠に経て
御座る 憎奴の何としてくりうそ 真平免て
被下い〜 あの大擲者とちへ逃るそ人ハなひか
とらへて呉い やるまいそ〜

(熊澤美戸)